

國學院大學学術情報リポジトリ

『源氏物語』における語り手の敬語不使用について：
〈語り〉の構造から「敬語の文学的考察」を再検討
する

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅川, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000917

『源氏物語』における語り手の敬語不使用について ―〈語り〉の構造から「敬語の文学的考察」を再検討する―

浅川 哲也

はじめに

本稿は、『源氏物語』の地の文において、敬語を用いるはずの人物（対象）に対して相応の敬語がついていない例を、語り手による敬語不使用の問題として扱い、これに『源氏物語』の〈語り〉の構造という観点からいくつかの検討を加えることを目的とする。

ここで敬語不使用として扱う敬語は、いわゆる素材敬語に限定し、敬意の対象となるべき人物が動作主体の場合は主体敬語である尊敬語、敬意の対象となるべき人物が動作客体の場合は客体敬語である謙讓語（甲）となる敬語のこととする。自卑敬語の謙讓語（乙）と、対者敬語の丁寧語

とは、しばらくこの考察の範囲外とする。

敬語不使用とは、『源氏物語』の地の文・発話文（内話文を含む）において、ある人物が動作主体または動作客体となる文の述語部分（形容詞・形容動詞が述語となる場合は除く）が敬語表現となっていないものをいう。¹敬語不使用の例が地の文にあれば、それは語り手による敬語不使用である。また、一つの文で文末以外にも文節ごとに敬語のつく可能性の高い帝（上皇・后・東宮も含む）が動作主体または動作客体であって、文中の当該の文節に敬語のみられない例もこれに準じた扱いとする。

『源氏物語』のテキストは『新編日本古典文学全集』を用いたが、用例の掲出で表記を一部改めたところがある。

用例の位置はへゝ内に巻名と『新編日本古典文学全集』のページ数で示した。文中で『源氏物語』の巻名を示すときは「」で示した。用例文中の二重傍線部は敬語不使用の箇所、一重傍線部は通常の敬語使用の箇所であることを示す。

一、『源氏物語』の〈語り〉の構造

『源氏物語』の言説についての研究は、いわゆる草子地の研究から、玉上琢彌氏の「物語音読論」を経て、今日の〈語り〉の研究に進んでいる。玉上氏の「物語音読論」は、『源氏物語』に三人の作者を仮構している。曰く、「語り伝える古御達（女房）」、「物語の筆記編集者」の女房、「読み聞かせる女房」の三者である。中野（一九六四）は、玉上説を批判して『源氏物語』は「すべて物語世界を高所から見下すことのできる位置」から物語作者によって書かれているとした。それに対して、三谷（一九八二・二〇〇二）は、「竹河」の巻の語り手が女三宮事件や薫の出生の秘密について（非知）であること、また、「桐壺」の

巻の語り手がその敬語運用から見て、桐壺帝の内侍所の典侍であることなどを指摘して、『源氏物語』の語り手が「超越的な全知的な視点」を有するものではないとしている。^③

『源氏物語』の〈語り〉の構造についてのこれまでの研究を概観すると、『源氏物語』の地の文は、作中人物として設定された語り手による発話であり、また、その語り手は複数であると考えられる。語り手の具体的な人物像としては、桐壺帝の内侍司の典侍、源氏や紫の上に近侍した女房たち、玉鬘に仕えた女房たちなどさまざまである。

語り手の実体をよく表わす具体的な例として、「竹河」の巻の冒頭部分を挙げる（引用文中の傍線と丸括弧による補入は浅川、以下同じ）。

これ（「竹河」の巻）は、源氏の御族（のちのおほとの）にも離れたまへりし、後大殿（＝鬚黒）わたりにありける悪御達（わるこたち）の落ちとまり残れるが問はず語りしおきたるは、紫のゆかりにも似（そ）ざめれど、かの女（を）ども（＝悪御達）の言ひけるは、「源氏の御末々（すえすえ）にひが事（こと）どもものまじりて聞

こゆるは、我よりも年の数つもり、ほけたりける人の
ひが言にや」などあやしがりける、いづれかはまこと
ならむ。
《竹河・五九頁》

この冒頭の文が示すのは、「竹河」の巻が鬚黒大将に仕
えていた古女房たちの問わず語りであること、それは紫の
上に仕えていた女房たちによる源氏の一族周辺に関する語
りとは異なるということである。「竹河」の巻の語りは、
鬚黒方の女房たちの語りであるが、しかし、この語りのさ
らに上位に「いづれかはまことならむ」と語る語り手がい
ることが示されている。「竹河」では、例えば夕霧の子の
蔵人少将に対して極端な無敬語であることが指摘されてい
る（森一九九三）。玉鬚の娘に執心する蔵人少将に対し
て、玉鬚が冷淡であることから、語り手である玉鬚に仕え
る女房たちは蔵人少将に敬語を使わないのである。語り手
の女房は主家中心主義であり、「竹河」の巻の語り手であ
る「悪御達」は、玉鬚邸内での宮仕え意識に徹して敬語運
用をしているのである^④。

しかし、語り手による敬語運用の相対化や意識的な敬語

運用の偏り、すなわち敬語の不使用は「竹河」の巻にとど
まるものではない。

二、玉上琢彌氏「敬語の文学的考察」の再検討

『源氏物語』における敬語不使用の問題を論じた説のひ
とつに、玉上琢彌氏の「敬語の文学的考察」がある^⑤。玉上
氏は、「敬語の文学的考察」において、「法則的なものは、
真実から離れ、かついたずらに誤解を招くだけかとも思う
が」と前置きをされた上で、『源氏物語』での敬語運用に
ついて五つの項目を挙げている。「敬語の文学的考察」に
ついて正しく検討するために、それらをすべて抄出すると
以下のとおりである。

一、敬語には高低の段階があり、地の文で一定の段階を
たもつのは最高の帝・后・東宮・上皇のみである。

二、地の文で最低にもせよ敬語の付きうるのは、皇族と
上達部の列以上で、特別の公達がこれに準じ、女性も
これにほぼ同じである（僧侶の扱いは別とする）。

三、身分差のある人々を一括して叙するとき、敬語はその高きに従う。

四、特に高貴なる人々と一座するとき、敬語は簡略になりまた省略されることがある。

五、文勢を図るため、その他特殊な効果を求めて、敬語が省略されることがある。

玉上氏は、二の例外と、四・五の「敬語が省略されることがある」という点についての一一の下位項目を挙げている。それを抄出すると左のとおりである。

〔一〕、身分がわからなければ敬語はつかない。

〔二〕、地の文で敬語がつく身分は皇族と上達部で、特別の公達を除いて殿上人以下には敬語がつかない。

〔三〕、最高敬語「のたまはす・賜はす・仰せらる・仰せたまふ・ゝせたまふ・ゝさせたまふ」の扱いは次のとおりである。

（一）「のたまはす」は、地の文では、帝・后・東宮・上皇（院）に限定される。准太政天皇となった源氏

でさえ「のたまふ・奏したまふ・与へたまふ」である。

（二）「ゝせたまふ・ゝさせたまふ」が地の文で源氏につくのは、実子冷泉帝の即位後、「総合」「松風」の巻からであるが、帝・后・東宮とは違いがある。

〔四〕、敬語の段階として、二重に敬語のつく段階を最高とし、以下いくつかの段階があるが、「桐壺」の巻の場合は以下のとおりである。

（一）最高段階（この場合桐壺帝）は、最高敬語が用いられるほか、敬語のつき得る箇所は一つも漏れることがない。

（二）次の段階（女御と上位の更衣）は、句末ごとにつく。

（三）最低の段階（桐壺更衣）は、その人についての叙述の最後に一つだけ申し訳のように敬語がつく。

（四）その中間段階はさらに幾段階かに分けられるようである。

〔五〕、「言ふ」の敬語の諸段階

（一）主格（話し手）に対する敬意の高さでは「のた

まはす」を別格として、「のたまふ・語らせたまふ・仰せらる・仰せたまふ・仰す」などの段階となる。

(2) 客格(聞き手)への敬意は、「申したまふ・聞こえたまふ(奏したまふ・啓したまふ)」となり、「聞こゆ(奏す・啓す)」・「聞こえさす」に至る。「と言ふ」は敬意に関係なく、「とあり・とて」は何の段階にでもあり得る。

〔六〕、同一人物でも場所によって敬語は簡略になり省略されることもある。地の文と限っても敬語は一定不変の法則に従って用いられているわけではない。ただし、帝・后・東宮・上皇は前述のとおり法則的である。

〔七〕、巻による敬語の多寡がある。例えば、「桐壺」と「帚木」では敬語の数が違う。宮中を舞台とするか、「帚木・空蟬」の中の品、「夕顔」の下品の品を舞台とするか、巻の基調によって敬語の多寡がある。

〔八〕、地の文と人々の詞(会話文・発話文)と心における敬語により、作中人物が立体的に感じられる。

〔九〕、敬語のつくはずの人についていない場合

(イ) 述語が形容詞・形容動詞の場合には敬語を伴わない(無敬語が許される／敬語の省略にはならない)。

(ロ) 最低段階は、その人についての叙述の最後に一つだけ申し訳のように敬語がつく。

(ハ) わざと敬語を省略して特殊な効果を図ったと見たい所がある。

(ニ) 作中人物に、読者が自己を没入し、彼の心をわが心と思ひ誤るに至らしめるために、敬語が省略されることがある。

〔十〕、自分自身に敬語を用いることがある。

〔十二〕、敬語のつかぬはずの人につく場合がある。

〔四〕の(1) および〔六〕に、帝に対する敬語運用は法則的であるとあるが、後述するように、『源氏物語』全体では例外的な箇所がある。

〔九〕の(ハ)として、敬語を添えて遇すべき人物に対して地の文が敬語を使用しない例のなかには、あえて敬語

を使用しないことによって「特殊な効果」を意図するものがあるという。その例として、玉上氏は「手習」の巻の冒頭の「横川の僧都」に対して地の文が敬語でもって遇していない箇所があることを挙げ、「横川の僧都」に対する敬語が地の文にないことを、僧都の母尼君が急病に倒れたこととの「切迫した雰囲気醸し出す為の技巧」であると説明しようとしている。

しかし、吉澤（一九四二）は、この例に関して当該箇所の敬語不使用を「前半に敬語の無いのは、僧都の行動（僧都が自らの仏道修行を優先して倒れた母の元に行かなかったこと…浅川注）を否定したもの、後半に敬語のあるのは、僧都の行動（母の元に赴いたこと…浅川注）を肯定したものである。」とし、敬語の加除は語り手の批判意識の現われであるとみている。⁶

〔九〕の（二）は、「作中人物に読者が自己を没入し彼の心をわが心と思い誤る」箇所であるという。その例として、玉上氏は、若紫を垣間見た後の源氏の回想の場面を採りあげている。

（源氏）「あはれなる人（＝若紫）を見つるかな。かかれば、このすき者どもは、かかる歩き^{あり}をのみして、よくさるまじき人をも見つけるなりけり。たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見るよ」とをかしう思す^{おも}。（源氏）「さても、いとうつくしかりつる児かな、何人ならむ、かの人（＝藤壺女御）の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思ふ心深うつきぬ。^{おも}（若紫・二〇九頁）

二重傍線部の語り手の敬語不使用の箇所について、玉上氏は「作者が光る源氏について客観的立場から語っているのではなく、読者が彼の心を直接知った感じである。地の文の『給ふ』は、作者が作中人物について語っている印であり、これがなくなると、物語という壁が一重取り外されて、読者は作中人物に面と接し、その心をわが心とするに至る。作中人物の詞を自ら口にし、地の文に述べる動作を行ない、心とされるところを「思い入れ」する、…若き光る源氏に、若き夕霧に、若き柏木に、彼らの思い悩むときにその『心』のあたりに、敬語の省略が多いことを、わた

くしはかく考えたい。」という主観的な説明を加えている。しかし、これは、吉澤（一九四二）のいう『源氏物語』中に見られる語り手の「批判」なのである。玉上氏のいわゆる「読者」と作中人物の同化という見方は『源氏物語』の〈語り〉の構造という観点からすると無理がある⁷⁾。

三、『源氏物語』の本文における敬語使用と敬語不使用

『源氏物語』の本文を、〈語り〉の構造と、敬語使用の有無という二つの観点から、「地の文（語り手の発話文）」と「作中人物の発話文・心話文」とに大別し、また、それぞれの文において「敬語使用」の文と「敬語不使用」の文とに分けて整理したものが次に示す【図1】である。

作中人物の発話文（会話文）・心話文（心内文）は、『源氏物語』ではすべて語り手を通して語られているので、実際には、作中人物の発話文・心話文は、地の文（語り手の発話文）の下位にある。

『源氏物語』の地の文における敬語不使用の文は、この

図によって相対的な位置づけがされるものと考えられる。本稿では、地の文における敬語不使用を問題とするところから、図中の（a）と比較しながら、（c）・（d）について検討する。

四、帝に対する地の文の敬語使用・不使用

帝には最高段階の敬語がつけられるとされる（玉上氏の「敬語の文学的考察」の〔四〕の（一）・（六））。事実、『源氏物語』における桐壺帝に対する地の文の敬語の配慮は濃密であり、桐壺帝が動作主体の場合は、次例のように文節ごとに敬語が使用される傾向がある。

1、（桐壺帝ハ）「いつしか」と心もとながらせたまひて、
急ぎ参らせて御覧するに、めづらかなる児の御容貌なり。
（桐壺・一八頁）

2、（桐壺帝ハ）おほかたのやむことなき御思ひにて、
この君をば、私物に思ほしかしづきたまふこと限りなし。
（桐壺・一九頁）

【図1】



3、(桐壺帝ノ) やむごとなき御思ひなべてならず、皇女たちなどもおはしませば、この御方の諫をのみぞ、なほわづらはしう心苦しう思ひきこえさせたまひける。(桐壺・一九頁)

4、(桐壺帝ガ) あまたの御方々を過ぎさせたまひて、隙なき御前渡りに、人の御心を尽したまふも、げにことわりと見えたり。(桐壺・二〇頁)

5、(桐壺帝ハ) いとどあはれと御覧じて、後涼殿にもとよりさぶらひたまふ更衣の曹司を、ほかに移させたまひて、上局に賜はす。(桐壺・二〇頁)

桐壺帝に比較して、朱雀帝の場合は、次例のように朱雀帝が動作主体・動作客体であっても敬語のついていない文節がしばしば見られる。これは文節の範囲での【図1】の(d)に相当するものと考えられる。

6、帝(朱雀帝)は、院(故桐壺院)の御遺言たがへず、(源氏ヲ) あはれにおぼしたれど、若うおはしますうちに、御心なよびたるかたに過ぎて、強きと

ころおはしまさぬなるべし、母后、祖父大臣とりどりにしたまふことは、(朱雀帝ハ) え背かせたまはず、世のまつりごと、御心になはぬやうなり。(賢木・一〇四頁)

7、(朱雀帝ハ) 御容貌も、院(故桐壺院)にいとよう似たてまつりたまひて、今少しなまめかしき氣添ひて、なつかしうなごやかにぞおはします。(賢木・二三頁)

8、(朱雀帝ハ) 朧月夜へノ いみじかりし御思ひのなごりなれば、人のそしりもしろしめされず、例の、上につとさぶらはせたまひて、よろづに恨み、かつはあはれに契らせたまふ。(須磨・一九七頁)

9、(故桐壺院ガ) 睨みたまひしに(朱雀帝ガ) 見合はせたまふと見しけにや、御目にわづらひたまひて、たへがたう悩みたまふ。(明石・二五二頁)

10、(朱雀帝ハ) 春宮にこそは譲りきこえたまはめ、朝廷の御後見をし、世をまつりごつべき人をおぼしめぐらすに、この源氏のかく沈みたまふこと、いとあたらしうあるまじきことなれば、つひに後の御いさめを

もぞむきて、赦ゆるされたまふべき定め出で来ぬ。〈明石・二六二頁〉

11、女君（＝朧あいら月夜）、顔はいと赤く匂におひて、こぼるばかりの御愛敬あいぎやうにて、涙もこぼれぬるを、（朱雀帝ハ）よろづの罪忘わすれて、「あはれにらうたし」と御覽みぜらる。〈濔標・二八一頁〉

12、（朱雀院ハ）御心地いと苦しきを念じつつ、おぼし起おこして、この御いそぎはてぬれば、三日過くして、つひに御髪みくしおろしたまふ。〈若葉上・四四頁〉

鈴木（一九八八）に、接続助詞「て」の上接動詞（述語）における敬語使用率は低くなるという指摘があるが、桐壺帝に対しては、「1・4・5」の例にあるように、接続助詞「て」の上接部分であっても念入りに敬語が使用されている。また、朱雀帝においても「7・8・9」など、接続助詞「て」の上接部分に敬語のある例は確認できるので、地の文において、助詞「て」の上接動詞を敬語表現とするか否かは、語り手の意図によって決定される範囲のものと考えて良い。語り手は、文の単位では朱雀帝に対して

敬語を欠かすことはないが、一つの文において述語部分のすべてに敬語を使用しているわけではない。これを桐壺帝の場合と比較してみると、桐壺帝と朱雀帝との間には一つの文の文節ごとにおける敬語の使用密度に明らかな相違がある。語り手は待遇表現上、朱雀帝を桐壺帝と同等に遇してはいない。

最高の敬語を以て遇されるべき帝に対して、語り手の待遇意識の弛緩が観察される例は冷泉帝の場合にも見られる。

13、（冷泉帝ハ）いとなつかしげに、思おもひしこと（＝玉鬘を尚侍として召すこと）のたがひにたる恨みをのたまはするに、（玉鬘ハ）面おもておかむ方かたなくぞおぼえたまふや。〈真木柱・三八五頁〉

14、（玉鬘）「いかならむ色とも知らぬ紫を心してこそ人はそめけれ。今よりなむ思ひたまへ知るべき」と聞きここえたまへば、（冷泉帝ハ）うち笑わらみて、「その今より染そめたまはむこそ、かひなかべいことなれ。愁うれふべき人あらば、ことわり聞かまほしくなむ」と、いたう恨み

させたまふ（冷泉帝ノ）御気色の、（玉鬘二ハ）まめやかにわづらはしければ、（玉鬘）「いとうたてもあるかな」とおぼえて、（玉鬘）「をかしきさまをも見えたてまつらじ、むつかしき世の癖なりけり」と思ふに、（玉鬘ハ）まめだちてさぶらひたまへば、（冷泉帝ハ）えおぼすさまなる乱れ言もうちいでさせたまはで、（冷泉帝）「やうやうこそは目馴れめ」とおぼしけり。

（真木柱・三八六頁）

15、（冷泉帝）「九重に霞へだてば梅の花ただかばかりも匂ひ来じとや」（冷泉帝ノ歌ハ）ことなることなき言なれども、（冷泉帝ノ）御ありさまけはひを見たてまつるほどは、をかしくもやありけむ。（真木柱・三八八頁）

16、（玉鬘）「かばかりは風にもつてよ花の枝に立ち並ぶべき匂ひなくとも」（玉鬘ノ）さすがにかけ離れぬけはひを、（冷泉帝ハ）「あはれ」とおぼしつ、かへり見がちにて渡らせたまひぬ。（真木柱・三八八〜三八九頁）

17、御座二つよそひて、主（＝源氏）の御座は下れる

を、（冷泉帝ノ）宣旨ありて直させたまふほど、めでたく見えたれど、帝はなほ限りあるゐやゐやしさを尽くして見せたてまつりたまはぬことをなむおぼしける。（藤裏葉・四五九頁）

冷泉帝では、玉鬘と関わる場面において、文節の述語部分の敬語が省略されている例が目立つ。この場面の語り手は玉鬘に仕える女房なのではないかと思われる。主人の玉鬘が冷泉帝に対して冷淡な態度をとっているところから、語り手は主人の玉鬘に肩入れをして、最高度の敬語で遇するべき冷泉帝にすら待遇意識を弛緩させているという印象を受ける。特に、16「（玉鬘ガ冷泉帝ニ）さすがにかけ離れぬけはひ」では、冷泉帝への客体敬語があつてしかるべき箇所ではないかと思われる。また、15では玉鬘を我がものとするのができなかった無念さを表わす冷泉帝の御製歌を、語り手が「ことなることなき言なれども」と酷評している箇所である。これは、帝への待遇表現上での配慮としての異様なものであるが、対象が帝であっても、語り手の心情が待遇上の配慮に大きく影響する例のひとつと考え

られる。

五、語り手の身分と敬語の使用・不使用

玉上氏の「敬語の文学的考察」〔四〕の（3）では、桐壺更衣に対する敬語は最低の段階とされている。しかし、桐壺更衣は、死後に「いま一階の位」〈桐壺・二五頁〉として従三位を追贈されているので、宮中にあるときは更衣として正四位相当であつたことがわかる。更衣の位階は四位または五位相当であるから、桐壺更衣は五位相当の更衣（地の文のいう「それより下臈の更衣たち」）に比して上位の更衣である。三谷（二〇〇二）の示すように「桐壺」の巻の語り手が従四位相当の典侍であるとすると、語り手は桐壺更衣に対して、身分関係上で敬語使用が必要なのである。

なお、「桐壺」の巻の地の文では、桐壺帝の宮中の典侍に対して敬語は使われておらず、また、「紅葉賀」に登場する源典侍にも敬語はつかない。

上にさぶらふ典侍は、先帝の御時の人にて、かの宮にも親しう参り馴れたりければ、いはけなくおはしましし時より見たてまつり、今もほの見たてまつりて、
…〈桐壺・四一頁〉

年いたう老いたる典侍、人もやむごとく心ばせありて、あてにおぼえ高きはありながら、いみじうあだめいたる心ざまにて、そなたには重からぬあるを、
…（源典侍ハ）似げなくも思はざりける。〈紅葉賀・三三六頁〉

玉上氏の「敬語の文学的考察」の二に示されているように、語り手は上達部には敬語を使用するが、殿上人以下の人物に対しては敬語を使用しない⁸⁾。

確認しておく、上達部（公卿）とは、摂政・関白・太政大臣・左大臣・右大臣・内大臣・大納言・中納言・参議・三位以上の貴族のことをいう。殿上人とは、清凉殿の殿上の間に昇ることを許されたものの通称であり、公卿を除く四位・五位で昇殿を許された者および六位の藏人をい

う。身分の呼称としては、上達部に次ぐ。なお、四位・五位の官人は諸大夫であり、六位以下の官人や昇殿資格のない家柄の四位・五位の官人は地下ちげである。

例えば、「須磨」の巻で、語り手は、太宰大貳（正五位上に相当）や、その子の筑前守（筑前国は上国、従五位下に相当）に対して敬語を使用していない。また、民部大輔みんぶおおい（正五位下に相当）の藤原惟光、少納言（従五位下に相当）の源良清、右近将監うこんのぞうの藏人（従六位上に相当）、その父の常陸介（常陸国は大国、従五位上に相当）、摂津守（摂津国は上国、従五位下に相当）に対しても語り手は敬語を使用することがない。

同座の身分最上位者への敬語を優先するとき、身分最上位者以外の人物に敬語が使われないことがあるが、この場合、源氏を身分最上位者とみての他の人物への敬語不使用ということになるのであろうか。しかし、位階が従五位の貴族に対してまったく敬語を使用しないということは、語り手の女性の身分の高さを示しているようにも思える。「桐壺」の巻の語り手は典侍（従四位相当）であると考えられるが、『源氏物語』の語り手は、「須磨・明石」のほか、巻

によつては身分がかなり高い女性であるという印象を受ける。この点においては、中野（一九六四）のいう「すべて物語世界を高所から見下すことのできる位置」にある語り手の存在が想起される。

六、語り手の批判意識

語り手の批判意識による敬語不使用の例は、『源氏物語』全体に見られるものである。

『帚木』の巻において、頭中将に対する敬語の不使用場面が、源氏との「対照的待遇」や、源氏方から見た「敵視的待遇」であるという指摘がある（大久保二〇一一）。また、野分の後、紫の上・玉鬘の姿を意図的に覗き見る夕霧に対する敬語不使用や、女三宮に密会する柏木に対する敬語の不使用場面は、「懲戒的待遇」による不使用であるという（大久保二〇一一）。これらの指摘は、吉澤（一九四二）のいう「批判」にあたると考えられる。次例も語り手の心情が敬語運用に影響を与えていると考えられる例である。

(源氏、兄弟の皇子、上達部ガ) あはれなる文を作りかはし、それにつけても、世の中にのみめでられたまへば、後の宮聞こしめしていみじうのたまひけり。

(弘徽殿太后ハ)「朝廷の勘事なる人は、心にまかせてこの世のあちはひをだに知ること難うこそあなれ、おもしろき家居して、世の中を諷りもどきて、かの鹿を馬と言ひけむ人のひがめるやうに追従する」など、あしきことども聞こえければ、「わづらはし」とて、絶えて消息聞こえたまふ人なし。〈須磨・二一〇六頁〉

弘徽殿太后の発話文を承ける地の文の主語が非情物の「あしきこと」であり、その述語を自発動詞の「聞こゆ」とみればこの文に敬語は不要であるが、須磨退去中の源氏と兄弟の皇子・上達部らとの漢詩文での交流を悪意で牽制する弘徽殿太后の発話文の直後に弘徽殿太后への直接的な敬語がないというのは、弘徽殿太后に対する語り手の感情が窺えるところなのではないか。

語り手は、桐壺更衣にいたく同情的であるし、桐壺更衣

の子の源氏に対しては「源氏びいき」(大久保二〇一一)と評されるような敬語運用上での肩入れが見られる。しかし、語り手は、主人公の源氏といえども藤壺への恋慕や、藤壺への恋情に関連づけて若紫に思いが及ぶような場面では、源氏に対して敬語を使わないことがある。また、源氏が王命婦を説きふせて藤壺女御との逢瀬を遂げる場面においても源氏への敬語不使用がみられる。これは、語り手の源氏に対する批判意識の現われであると考えられる。前掲の〈若紫・二〇九頁〉の例の他にも次の例が挙げられる。

(若紫ハ) つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじうつくし。(源氏)「ねびゆかむさまゆかしき人かな」と目とまり給ふ。(源氏)「さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人(＝藤壺女御)にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり」と思ふにも涙ぞ落つる。〈若紫・二一〇七頁〉

この若草(＝若紫)の生ひ出でむほどのなほゆかしき

を（源氏）「似げないほどと思へりしもことわりぞかし、言ひ寄りがたきことにもあるかな、いかにかまへて、ただ心やすく迎へとりて、明け暮れの慰めに見む、兵部卿宮は、いとあてになまめい給へれど、にほひやかになどもあらぬを、いかでかの一族におぼえ給ふらむ、ひとつ后腹なればにや」など思す。ゆかりいと睦ましきに、（源氏ハ）「いかでか」と深うおほゆ。〈若紫・二二七頁〉

藤壺の宮、なやみたまふことありて、まかでたまへり。上のおぼつかながり嘆ききこえたまふ御気色も、いといとほしう見たてまつりながら、（源氏ハ）「かかるをりだに」と心もあくがれまどひて、いづくにもいづくにもまうでたまはず、内裏にても里にても、昼はつれづれとながめ暮らして、暮るれば王命婦を責め歩きたまふ。（王命婦ハ）「いかがたばかりけむ、（源氏ハ）いとわりなくて（藤壺の宮ヲ）見たてまつるほどさへ、現とはおほえぬぞわびしきや。〈若紫・二三〇頁〉

地の文において、源氏は、桐壺帝のように文節ごとに敬語使用が配慮される人物ではないが、敬語があっても良いはずの箇所が敬語不使用である場合は、その場面での語り手の何らかの意図を酌み取る必要があると思われる。

おわりに

『源氏物語』の地の文は、作中人物として設定された身分の異なる複数の語り手がものを語る形式となっており、この形式が地の文における敬語の運用に大きな影響を与えている。敬語を使用すべき対象についての地の文の敬語使用の揺れ（敬語使用と敬語不使用）は、語り手の対象への心情を反映していると考えられる。それは語りにおける語り手の批判意識と、語り手の身びいき（同情共感的なものを含む）というふたつの感情の共存なのである。

(1) 主語が「御」である場合は述語動詞に主体敬語を使用しなくてもよく、また、連用修飾語が「御」である場合は被修飾語に客体敬語を使用しなくてもよいとされる(大久保一九七四)。

(2) 「物語音読論」は、玉上琢彌(一九五〇・一九五五)に拠る。

(3) 尚侍(ないしのかみ・しようじ)は、四等官における内侍司の長官(かみ)に相当する。准位(男性官人の官位相当に相当する)は従五位、大同二年(八〇七年)からは従三位である。定員は二名。多く摂関家の娘が選任された。典侍(ないしのすけ・てんじ)は、四等官における次官(すけ)に相当する。准位は従六位、大同二年(八〇七年)からは従四位である。定員は四名。大納言・中納言を中心に公卿の娘が多く選ばれた。掌侍(ないしのじょう・しようじ)は、四等官における判官(じょう)に相当する。准位は従七位、大同二年(八〇七年)からは従五位である。定員は正官四名、権官二名の計六名。以上の記述は、浅井(一九〇六)・和田(一九二六)に拠る。

(4) 竹部(二〇〇八)によると、自分の仕える主人が大臣で

あるか否かとは無関係に主人を「おとど」と呼ぶことがあるという。女房などが自分の仕える主人に対して敬語を使用するとき、待遇度が上昇する傾向があるようである。

(5) 玉上(一九五二)。引用は、『源氏物語評釈 別巻一』(角川書店、一九六六年)収録の「敬語の文学的考察―源氏物語の本性(その二)―」による。

(6) 吉澤(一九四二)は、「源氏物語中の行爲には一つく必ず批判が加えられてある。(中略)中にも、敬語を除くことによつて貶責の意を表はす様式は、私が國語学を究めつゝあるものだけに、特に興味をひくのである。(中略)敬語助動詞を省略しつゝ、その行爲に對して遺憾の意を表明するといふのが所々に見えてゐるのである。」という説である。

(7) 浅川(二〇〇九・二〇一〇)を参照。

(8) 桐壺更衣の父である故大納言(正三位)には敬語がついていない。大納言は公卿であるので、この点是不審である。父の大納言は亡くなりて、母北の方なむいにしへの人のよしあるにて、親うち具し、さしあたりて世のおほえはなやかなる御方々にもいたう劣らず、何ごとの儀式をももてなしたまひけれど、とりたててはかばかし

き後見^{うしろみ}しなければ、事ある時は、なほ廻りどころなく心細^{こころこわ}げなり。〈桐壺・一八頁〉

『源氏物語大成索引篇』によると、『源氏物語』中に動詞「なくなる」は四七例あるが、「なくなりたまふ」のように尊敬語補助動詞「たまふ」がつく例は、その中の九例である。「たまふ」がつきうるので「なくなる」は普通語である。語り手は故大納言に「なくなりたまふ」という敬語を使用していない。

参考文献

- 浅井虎夫（一九〇六）『女官通解』（所京子校訂『新訂女官通解』講談社学術文庫、一九八五年）
- 穂田定樹（一九六九）『源氏物語の内話』『親和国文』一二月号（『中古中世の敬語の研究』収録、一九七六年、清文堂）
- 浅川哲也（二〇〇九）『源氏物語と敬語法——「若紫」地の文における敬語の不用について——』『國學院の古典』第五輯
- （二〇一〇）『源氏物語』地の文における帝に対する敬語使用について『新國學』復刊第二号
- 荒井 弘（一九八五）『源氏物語の待遇表現についての私見——桐壺巻より若菜巻まで——』『平安文学研究』七四輯

榎本正純（一九八二）『源氏物語の草子地——諸注と研究——』笠間書院

大久保一男（一九七四）『「御」の使用と用言性敬語の不使用』

『國學院雜誌』昭和四十九年七月（大久保一男『源氏物語の敬語法』所収、一九九五年、おうふう）

——（一九九五）『源氏物語の敬語法』おうふう

——（二〇〇一a）『敬語表現「わたり給ふ」小考』『國學院雜誌』一月号

——（二〇〇一b）『源氏物語の敬語法に関する一つの事例』『国語研究』第六四号

——（二〇〇二）『敬語』『源氏物語事典』大和書房

——（二〇一一）『源氏びいきの待遇法——源氏物語における敬語不使用場面について——』『國學院雜誌』

加古有子（二〇一三）『源氏物語』の文学的敬語の研究——「若

紫」巻の考察を中心に——『解釈』十一・十二月号

小島俊夫（一九五四）『源氏物語における敬語の「加除」』『國語』（東京教育大学国語国文学会）第三卷第二号

杉崎一雄（一九八八）『平安時代敬語法の研究——「かしこまりの語法」とその周辺』有精堂

杉山康彦（一九七三）『源氏物語の語りの主体（上）——その虚

構の構造について―『文学』（岩波書店）四一卷四月号

――（一九七三）『源氏物語の語りの主体（下）―その虚

構の構造について―』『文学』（岩波書店）四一卷五月号

鈴木裕史（一九八八）『敬語の使用密度について―』紫式部日

記』と『枕草子』を資料として―『國學院雑誌』一二二月

武原 弘（一九七五）『源氏物語における敬語の特殊相―地の

文における尊敬語の加除を中心に―』『日本文学研究』第

一一号

竹部歩美（二〇〇八）『源氏物語における『おとど・おほいと

の・大臣』について』『都大論究』第四五号

高橋 亨（一九七七）『物語の〈語り〉と〈書く〉こととは何

か―源氏物語の作者の詞』『国文学』九月号

――（一九七八）『語り』の表現構造―いわゆる草子地に

ついて―』『国文学解釈と鑑賞別冊 講座日本文学 源氏

物語 下』五月号（高橋亨『源氏物語の対位法』収録、東

京大学出版会、一九八二年）

玉上琢彌（一九五〇）『物語音読論序説』『国語国文』一二月号

（玉上琢彌『源氏物語評釈 別巻一』収録、角川書店、一

九六六年）

――（一九五二）『敬語の文学的考察』『国語国文』三月号

（玉上琢彌『源氏物語評釈 別巻一』収録、角川書店、一

九六六年）

――（一九五五）『源氏物語の読者―物語音読論―』『女子

大文学』第七号（玉上琢彌『源氏物語評釈 別巻一』収

録、角川書店、一九六六年）

中野幸一（一九六四）『源氏物語の草子地と物語音読論』『学術

研究』第一三号

東原伸明（一九九四）『研究史 源氏物語の〈語り〉と〈言

説』三谷邦明編『源氏物語の〈語り〉と〈言説』有精堂

（東原伸明『物語文学史の論理―語り・言説・引用―』収

録、二〇〇〇年、新典社）

藤井貞和（二〇〇一）『平安物語叙述論』東京大学出版会

三谷邦明（一九七八）『源氏物語における〈語り〉の構造―〈話

者〉と〈語り手〉あるいは『草子地』論批判のための序章

―』『日本文学』二七―一一（『物語文学の方法Ⅰ』収録、

一九八九年、有精堂）

――（一九八二）『源氏物語第三部の方法―中心の喪失あ

るいは不在の物語―』『文学』五〇―八（『物語文学の方法

Ⅱ』収録、一九八九年、有精堂）

――（一九八九）『物語文学の方法Ⅰ』有精堂

—— (一九八九)『物語文学の方法Ⅱ』有精堂

—— (一九九二)『物語文学の言説』有精堂

—— (二〇〇二)『語り』『源氏物語事典』大和書房

森 一郎 (一九九三)『源氏物語の人物造型と語りの視点・方法——竹河巻の敬語法をめぐって——』『日本文藝學』第三〇号

吉澤義則 (一九四二)『源氏隨攷』晃文社

鷺山茂雄 (二〇〇六)『源氏物語の語りと主題』武蔵野書院

和田英松 (一九二六)『修訂官職要解』(所功校訂『新訂官職要解』講談社学術文庫、一九八三年)

藁谷隆純 (一九九一)『源氏物語』の男女への敬語』『日本語日本文学』(創価大学) 創刊号